

## マルクスの学説史研究と制度論

中尾訓生

### 一、問題意識

マルクスの学説史研究と云えば、まとまったものとして『剰余価値学説史』が、私にはすぐに想起されるのであるが、「ブルジョア経済の諸カテゴリー批判」と云うマルクス体系の核心を把握するためには、『剰余価値学説史』の検討だけではそれは、不可能である。

ここで検討すべきことは「カテゴリー」批判が社会の運動法則の解明となるというマルクスの主張である。カテゴリー批判は社会意識批判ということであるが、近代社会の運動法則の解明は主体とは離れた実体の探求となっている。カテゴリー批判は観念批判であり、主体を対象とせざるをえないのである。社会の運動法則は主体の外にあるものと認識されている。かくて、「経済学批判」には異なった対象が内包されているのである。異なった対象が如何に統一的に絡みあって処理されているかの解明こそが本稿の重要課題である。核心を把握するためには『資本論』解釈者の多くが無視している論理を把握しなければならない。不思議なことにマルクスが再三、その論理の重要性を指摘しているにもかかわらず、日本のマルクス経済学者は、これを無視している。

まず、マルクスが重要であると指摘している文節を取り上げてみよう。

『経済学批判』の「一章、商品」に付されている「A 商品の分析にかんする学説史」と『資本論』「一篇、商品と貨幣」の「一章、二節、商品に表示された労働の二重性」において指摘されているところのものである。引用している文節から「ブルジョア経済の諸カテゴリー批判」に帰結する論理を明らかにしていくことが、当面の課題である。

『剰余価値学説史』では主に量の分析がなされている。即ち先行する論述

に剰余価値率という尺度を導入して論述の整合性を意図している。例えば、価値と価格、剰余価値率と利潤率、等々これらの関係を整理していつているのである。『剰余価値学説史』は量分析という点で純粋経済学と共通の土俵で議論が可能となっている。<sup>1)</sup> シュムペーターは、マルクスが苦闘して獲得した価値形態論を全く意味ないものとして退けた。経済学批判の土台を提示している価値形態論を意味ないものとするればマルクス経済学は純粋経済学と異なるところはない。

異なるところはないというだけでなく、マルクス経済学は質の劣ったものとして純粋経済学に対置されることになっている。

経済学批判の論理はマルクス体系の出発点に措定しなければならないのである。経済学批判を可能にするところのものが出発点に指定されていなければならないのである。

マルクスにとって『剰余価値学説史』の理解は経済学批判を理解することが必須なのである。

経済学批判の論理を欠落させると私は、マルクス価格論には労働価値説は必要でないという柴田の主張に同意せざるを得ない。<sup>2)</sup> かくてマルクス経済学はその独自性を失い、シュムペーターの云う純粋経済学に包摂されてしまうであろう。

## 二、ブルジョア経済学批判と学説史の研究

ここで検討するのは (A) と (B) の叙述である。

(A) 「商品を二重の形態の労働に分析すること、すなわちその使用価値を現実的労働、または合目的な生産的な活動に、交換価値を労働時間または平等な社会的な労働に、分析することは、古典派経済学……イギリスではウィリアム・ペティに、フランスではボアギュベールにはじまり、イギリスではリカードに、フランスではシスモンデイにおわった古典派経済学……の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的な終局的結果である。」<sup>3)</sup>

(B) 「最初から商品はわれわれにたいして二面的なものとして、使用価値

および交換価値として、現れた。……商品に含まれている労働の二面的性質は私がはじめて批判的に証明したのである。この点が跳躍点であって、これを巡って経済学を理解があるのであるから、この点はここでもっと詳細に吟味しなければならない。」と云う。<sup>4)</sup> 私たちにはマルクスの経済学の方法として下向、上向の周知の方法が存在していることが想起されるのである。

その方法とは（一）下向の叙述、（二）上向の叙述と呼ばれているものである。

『資本論』は「商品に表示された労働の二重性」から始まり、三位一体（資本—利子、労働—賃金、土地—地代、）で終わる叙述の体系となっているが、この叙述は恣意的でなく、論理的である。

「実在的で具体的なもの、現実的前提をなすものから始めること、……表象された具体的なものから、だんだん稀薄になる抽象的なものに進んでいって、ついには最も簡単な諸規定に到達」する。これは下向の方法である。<sup>5)</sup>

ここで解釈しなければならないのは上向叙述を規定している論理である。すなわち上向叙述に転じるカテゴリーはいかなるものか、これが要点である。下向から上向への起点としての基礎カテゴリーは「商品に表示された労働の二重性」である。

上向の叙述とは『資本論』体系、つまりブルジョア経済学の諸カテゴリー—批判なのであり、しかもそれは、近代社会の運動法則の解明となっているということである。

商品とは人間の欲求を充足させる具体的なモノであるだけでなく、具体的な属性は捨象された単なる抽象物（価値）として存在している。前者の属性は超歴史的であるが、後者は市場という歴史的に規定されている。

商品にはかかる労働の二重性格が反映されているというのである。マルクスはこの二重性格を商品に関する諸論述の検討を通じて発見したのである。

人々が商品について語るのは商品が人々の関心事であるから、つまり商品は富なのである。

(A) と (B) の検討にはいる。

マルクスは、労働の二面的性質を古典派経済学の経済的論述の解釈によってはじめて批判的に証明したと述べている。

「労働の二重性」を基軸に (A) と (B) は叙述されているということである。

「労働の二重性」が経済学批判体系の内にどのように位置づけられているかを解釈するのであるが、「労働の二重性」それ自体を取り上げる段階には至っていない。<sup>6)</sup>

再三述べているように経済学批判にとって解釈すべきは「……表示された(dargestellten)労働の二重性」という「表示された」という意味の解釈である。

(A)では、古典派経済学を渉猟して「労働の二重性」の認識に到達したと論じている。

ここでは経済学、商品についての観念体系(学説史)と労働の関係が扱われている。

(B)では「労働の二重性」が「経済学」の理解に決定的に重要であると述べている。

『経済学批判』『資本論』において宇野弘蔵をはじめとしてマルクス解釈者は「労働の二重性」については解釈している。しかし、資本論解釈者の殆どは「表示された」という意味は解釈していない。

「表示された」ということの重要性を指摘しているのは哲学者の滝沢克己である。

ただし、滝沢は宇野弘蔵の生産論を牽強付会の解釈をしてマルクスを誤らしめた。

滝沢は人間論から、この「表示された」という意味を解釈している。労働の二重性を滝沢は、人間労働の根源的本質と解釈している。物質的生産労働の本質には根源的な二重性が含まれている。それは人間が地上に成り立ってくる瞬間すでにそこに含まれているところの……人間生活に根源的なも

のであると云う。<sup>7)</sup> 根源的なものが商品に表示されていると云う。滝沢は「・ ・ ・表示された」ということを以下のように述べている。「生産一般」の本質は一人の人の事実に成立と同時に、すでに実際、人間の世界を無条件に支配している。人間が事実に成立するということは、とりもなおさず、その支配に順応してか背叛してか、必ず何らか特定の形と程度において、永遠に現在の・あらゆる社会に普遍的なその本性を反映＝表現しつつ活動するということである。この反映＝表現の特定の形がすなわち普通に云う「特殊歴史的な人間社会・人間生活の形態」にほかならない。ここで述べられている根源的なものとその表現関係を滝沢はマルクスの商品に表示された労働の二重性に読み込むのである。滝沢は述べている。根源的表現関係はとりもなおさず、生産一般と特殊歴史的社会的根本的包摂関係である。<sup>8)</sup> 労働の二重性は主体内で拮抗している性向を示しているのである。滝沢の云う「根本的包摂関係」は私の理解している「労働の二重性」とは違っている。

さらにマルクスは次のように国民経済学の相違についてまでも論じ、私の興味を喚起する。マルクスはイギリスの経済学とフランスの経済学の性格の違いをどこにその根拠を求めているのであろうか。いうまでもなく、それは、労働の二重性である。「ペティとボアギュベールとの著作および特性の比較研究は、17世紀の終わりと18世紀の始めとにおけるイギリスとフランスとの社会的対立を明瞭にするであろうという点は別としても、イギリスの経済学とフランスの経済学とのあいだの国民的な対照の発生的説明となるであろう。同じ対照は、リカードとシスモンデイとにあっても、終結的にくりかえされている。」<sup>9)</sup>

マルクスがリカードを古典派経済学の完成者としたのは、ペティからリカードへの流れが労働価値説純化過程と解釈し得ると判定したからである。換言すると純化とは労働価値が素材的内容から分離する過程でもある。使用価値に結実する労働ではなく、生産物を量化する労働、使用価値の差異を捨象してしまう労働である。労働、労働の対象的諸条件が無差別一様な抽象世界の存在となっている。労働は一般的抽象的労働である。

フランスの経済学を象徴するのはシスモンデイであるが、マルクスによると労働価値の純化は使用価値的性格、具体的属性に幻惑されて妨げられているという。

モノを使用価値的視点から観察するのは常識世界の事である。この常識世界にあってリカードは表面に現れているものとは全く別様の観を呈するブルジョア経済を解剖したとマルクスは評している。<sup>10)</sup>

さてマルクスによると商品とはブルジョア社会の「富」の元基である。ブルジョア社会の人々は意識的にか、あるいは無意識的に「富」を追求している。だから「商品」についての人々の語っているところの内に彼らの行動が反映しているのである。

これが「・・・表示された」という意味内容である。「・・・表示された」のはブルジョア社会を支えている労働、すなわち抽象的労働である。しかし、主体は抽象的労働だけで覆いつくされてしまうわけではない。人間には抽象的労働の殻を突き破る労働が内包されている。抽象的労働の殻とはブルジョア社会の観念、常識のことであり、この観念を批判するのは具体的有用労働と呼ばれているものである。

イギリス経済学とフランス経済学の差異は抽象的労働と具体的労働との違いによってもたらされている。この違いはイギリスとフランスの経済状況の違い、更にはイギリスとフランスの文化的違いにも及ぶものである。<sup>11)</sup>

抽象労働を遂行している彼、彼女は労働の对象的諸条件を量に還元している。経済化は抽象的労働によって支えられている。効率化は人格、自然界をも巻き込むことで精神の貧困をもたらしている。この社会では効率性を達成しているものが評価されている。

抽象的労働の世界から外れた具体的有用労働は对象的諸条件を有用、具体的属性から判定する。具体的有用労働の世界では量化は最も遠ざけられている。

甲は抽象的労働を、乙が具体的労働をしているというよりも甲、乙はそれぞれ抽象的労働、具体的労働をしていると解釈している。私は主体内で労働

の二重性が拮抗していると解釈している。資本主義経済の進展は抽象的労働を体勢化していくのであるが、具体的労働は人間の本性に内属しているが故に抽象的労働によって征服されてしまうというわけにもいかない。滝沢が発見、評価した点である。抽象的労働の世界を具体的労働が批判し、抽象的労働を具体的労働で置換していくという芽はなくなる。「経済学批判」の根拠はここにある。

以上述べきたところから、その主旨を生かすために抽象的労働を価値実践、具体的有用労働を使用価値実践と呼ぶことにする。この社会は価値実践によって支えられている。

三、ブルジョア経済学の諸カテゴリー批判は近代社会の運動法則の解明でもある。

諸カテゴリーは実践の二重性を反映している。反映しているというのは諸カテゴリーの解釈の内に実践の二重性を読み取ることが出来るということである。経済的論述は実践を表現しているのである。経済緒論述と実践はリンクしているのである。そうであるが故に、経済的論述の解釈（＝経済学説史研究）は一転して社会の運動、社会的実践を明らかにするという事になっている。

資本主義社会は拡大深化すればするほど当の社会を支える実践は人々を価値化していく。人々は対象を量的に貨幣で尺度する。合理的経済人とは徹頭徹尾価値化した人間の事である。モノの具体的属性は貨幣で評価される場合にのみ人々によって表象される。

(A) と (B) の検討を通じて私は、経済論述の解釈方法を以下のように整理する。

図一 1

解釈対象	解釈枠組	価値範式	使用価値範式
価値カテゴリーで構成された論述		一	二
使用価値カテゴリーで構成された論述		三	四

範式とは使用価値範式と価値範式の二つ存在する。

使用価値範式は合目的な生産活動（具体的有用労働＝使用価値実践）に応じ、価値範式は同質の社会的労働（抽象的労働＝価値実践）に応じている。

前者の場合、フランス経済学を代表するシスモンデイが応じ、後者の場合、イギリスを代表するリカードが応じている。シスモンデイはフランスの文化、伝統を象徴し、経済によって性格づけられている。リカードはイギリスの文化、伝統、を象徴しており、経済によって性格づけられている。

社会には二つの実践が存在しているから、範式も二つ存在している。

人はどちらかの範式に依拠して解釈をしている。

解釈は意識的行為であるが、解釈の対象として価値カテゴリーを選択するか、使用価値カテゴリー選択するかについては彼らは無意識的である。

どちらのカテゴリーを選択するかは彼らの実践が規定している。

彼らにとって所与である主語を解釈するとき、すなわち、「資本は労働手段である」「労働手段は資本である」というとき、この両文節は同じ意味内容を指示しているのではない。先の文では主語は「資本」、後の文では主語は「労働手段」である。大事な点は両文では資本の説明が異なってくるということである。

解釈の枠組は価値範式か、使用価値範式である。どの範式を採用するかも彼らの実践によって規定されている。

価値実践者は価値カテゴリーを、使用価値実践者は使用価値カテゴリーを選択している。

価値実践者のモノの見方、考え方と使用価値実践者のそれとは違っている。

したがって同じモノにたいしても彼らのそのモノへの関わり方は違ってい

る。

人は自己の実践の質と解釈対象としてのカテゴリーが結ばれていることを意識してはいない。

私はモノの具体的属性に着目し、それが人間に及ぼす作用、反作用の視角から対象を解釈するとき、使用価値範式に立脚しているといい、対象の量化を基本に対象を解釈するとき、価値範式に立脚しているといっている。

使用価値範式による解釈は具体的イメージを喚起するようなカテゴリーを使用するのに対し、価値範式による解釈は無差別一様な量化のカテゴリーを使用する。

(A) でマルクスが検討した諸論述はペテイからリカードを完成者とする流れ（イギリス経済学）とボアギュベールからシスモンデイへの流れ（フランス経済学）であるが、この流れは表の（一）と（三）に位置づけられる。

イギリス経済学とフランス経済学の相違は解釈の対象、つまり主語の違いである。この違いは実践の違いを反映している。

- （一）は価値実践者がモノ（価値実践の表現体）を価値的に解釈する。
- （二）は価値実践者がモノ（価値実践の表現体）を使用価値的に解釈する。
- （三）は使用価値実践者がモノ（使用価値実践の表現体）を価値的に解釈する。
- （四）は使用価値実践者がモノ（使用価値実践の表現体）を使用価値的に解釈する。

価値実践の表現体としての「商品」には価値実践が表示されている。

使用価値実践の表現体としての「商品」には使用価値実践が表示されている。

「表示されている」ということはモノ（商品）を価値的に、あるいは使用価値的に取り扱っているということ、つまりモノに価値実践者として、あるいは使用価値実践者として働きかけているということである。表示された実践の二重性を強調する所以は論述を解釈するとき、実践主体の志向性が反映しているからである。

解釈の論理整合性は結局のところ実践の志向性に依存することになっていく。

マルクスの方法によって検討された論述は (一) (二) (三) (四) のどこかに位置づけられる。マルクスに依ると (一) はリカードの論述が, (二) はマルサスの論述が, (三) はシスモンデイの論述がその位置を占める。

(一) が科学的という評価を得るのは主語と述語が一致しているからである。

リカードの理論にあっては人間は徹底的に時間 (価値) に還元されてしまっている。

リカードは人間臭さを徹底的に排除している。だから当時の人はリカードは他の遊星から落ちてきた人のようであると評していたのである。

(二) は俗流的と決めつけられているのであるが, 結論は価値実践を擁護することになっているからである。解釈の深まりは主語と述語の乖離を甚だしくして, 乖離は現状の肯定で埋められていく。

(三) は (二) と同様に乖離を甚だしくしていくのである, (二) との決定的違いは使用価値実践者は現状の容認, 肯定を拒絶していく。

(四) は生態系保護論 (環境保護論) が位置づけられる。生態系というのはモノの属性によって結合しているのであるから, これが解釈の対象となっているのは解釈者が使用価値実践者であるからである。解釈の対象を使用価値範式で解釈する。「解釈」ということは解釈者にとって意識的行為であるが, 解釈者は解釈対象が価値実践の表現体 (価値カテゴリー) であるのか, 使用価値実践の表現体 (使用価値カテゴリー) であるのか, という事について意識しているわけではない。

“生産手段は資本である” “資本は生産手段である” と云う二つの文節を比較してみると, 主語を説明するために述語の連鎖が続いていく。生産手段は使用価値カテゴリーであり, 資本は価値カテゴリーに分類されていくであろう。

主語として生産手段, あるいは資本を何故, 彼, 彼女が採用したのかとい

うことについては彼、彼女は意識的ではないが、主語を説明する述語については彼、彼女は意識的である。

解釈の対象であるカテゴリーは解釈者が解釈するまえに、それぞれの実践によって価値的、あるいは使用価値的に意味を与えられている。解釈者は解釈者にとって所与であるこれら価値カテゴリーのバスケット、あるいは使用価値カテゴリーのバスケットから解釈の対象としてのカテゴリーを選びだしていくのである。解釈の対象であるモノは価値実践者にも使用価値実践者にも同じなのである。それらのモノに如何なる意味を付与するかは彼、彼女の実践によって違っている。

解釈の構成、組立ては解釈者が意を用いるところであり、これによって解釈者の能力が判断される。前述しているように、解釈内容の大枠は解釈者の実践、あるいは解釈者が依拠している実践によって規制されている。

論述が体系的であるためには主語と述語の一致が最低条件である。それは(一)か(四)に分類される論述である。(二)と(三)に分類される論述は説明を進めるにしたがって主語と述語の乖離(論理不整合)をもたらしてくる。この乖離はマルサスのように人間性に帰着させるか、シスモンデイのように歴史に帰着させることでその不整合性を回避する。

シスモンデイは商品生産の拡大、つまり使用価値の生産でなく、価値の生産が失業・破産を生じさせ、貧富差を拡大させていることを的確に把握していた。価値範式による事態の解釈は資本主義経済の解明を深めていくのであるが、深めれば深めるほど彼が想定している「あるべき人間の生活」と「現実の人間の生活」との乖離を感じさせる。彼は価値生産が一般的であるとき、使用価値生産の一般化に向けた努力する。歴史時間の遡行で単純商品生産、「あるべき人間生活」の実現を目指して努力する。

マルサスには、すなわち(二)の論述には如何なる評注が与えられるであろうか。

価値実践によって支えられている資本主義経済が生み出している労働災害、失業、貧困・・・というような諸症状(価値実践の表現体)を人間の肉体的、

生理的要因からの帰結であると診断する。

マルサスは『人口の原理』(Malthus, Thomas, Robert)で貧困は社会制度に原因があるのでなく、人間の性向に原因があると云っている。社会制度を改めても人間の性向を変えなければ、貧困を除くことができないと主張している。

ベンデイクス云うところを聞いてみよう。『人口の原理』はつぎのような問題に対する解答を与えていると云う。「いかにしたら上層の諸階級に貧民に対する責任を拒否しつつ同時に貧民に対する権力を正当化することができるだろうかという問題、如何にしたら貧民は危険な独立心をはぐくむことなく、自らに頼ることを教えられることが可能なのだろうかという問題」である。マルサスは上層の諸階級には自らの実践に自信を与え、貧民には現状は自らの実践の帰結であることを、単純な原理で説明した。人口の幾何級数的増加傾向と食料の算術級数的増加傾向という原理は、彼の考えている「人間の性向」と「土地の属性」とから導かれている。貧困は人が独身でとどまるべきときに、結婚してしまったと説明される。これらの原理から導出される見解は「富める者にたいしては好都合であり、彼らにへつらうものであったが、同じくらい貧民には冷酷なものであった。」<sup>12)</sup>

(二)(三)の検討を通じて明確になったことは実践の志向性と経済解釈との関係である。これについては再三述べてきたところであるが、改めて確認しておく。

ブルジョア経済学の諸カテゴリー批判が近代社会の運動法則の解明になる。ここで上記の命題を追求する図式を提示しておきたい。

### 1 : {価値実践⇔表現体系⇔解釈}

この図式は主体の側面からの社会考察である。

価値実践は資本主義社会を支えている実践である。

実践は表現体をもっている。

実践はその実践を正当化するために解釈を社会=他者に提示する。

社会総体を把握するための図式として

### {価値実践⇔市場⇔社会的物質代謝=経済}

を提示している。

ここで私が明らかにすべきことは学説史研究と社会構造の解明との関係である。

1の図式での「解釈」は学説史研究に依拠している。学説史とはマンデヴィルや重農主義、重商主義の所説までも含めた経済観念まで幅を広げて捉えている。

「解釈」の対象である表現体系は、実践の表現体が秩序を有してきているということで「解釈」の対象になっている。体系と呼び得るゆえんである。

価値実践がルーティン化するとその表現体は秩序だってくる。

主たる解釈者は政策担当者であり、関係企業、有識者、・・・であろうが、彼らは自己の立場、自己の実践を正当化するために解釈を社会に提示している。

教育制度、租税制度、財政制度、福祉制度、貿易制度、司法制度、・・・表現体系とはこのような諸制度の結合したものであり、制度の維持者はその存立の根拠、及び正当性を提示している。

制度の維持者は表現体系の部分を切り取って、そこから制度の存立を説明していく。

これが全き説明とはなり得ないことは明らかであろう。部分を切り取って、しかも部分間の調整抜きにして全体相を捉えることはできないであろうから。

制度の動態は各制度が自己を主張していくなかで[2]に適応していくことで存立が図られていると私は考えている。ここで問題とすべきは各制度の主張者はあくまで自己の立場を補強せんとしているが、そのとき、彼、彼女が使用している用語、採用している用語は、彼らの実践の質によって規定されている。[2]に適応しているかどうかは[1]によって検針されるのである。

彼らの解釈を検討することは彼らの実践の質を検討することになっていくのである。

ブルジョア社会を検討するというとき、カテゴリーの順序にも注意をはらわなければならないのである。マルクスが指摘しているように歴史時間に従うならば、地代を論じて利潤を説くことになるが、ブルジョア社会の地代を論じるためには利潤を明らかにして後、地代の説明に入るべきと彼は述べている。商品から貨幣、貨幣から資本へとカテゴリーは順序づけられるべきとマルクスは云う。

カテゴリーの順序を強調するのは恣意的な解釈を避けるためである。恣意的な解釈とは正当性を確保するために論理を犠牲にするか、事の問題の解決を人間性に還元する仕方である。やはり私たちは「労働の二重性」という出発点に帰らざるを得ないことになる。

これからブルジョア社会の人間を規定しなければならない。ブルジョア社会の人間は自由な何物にも拘束されない人間というわけにはいかないのである。マルクスが批判してやまないロビンソン・クルーソを想起すればよいであろう。

マルクスがその措定に最も苦闘した「価値形態論」を理解できるのである。金に幻惑された人間を描いているシェークスピアのアテネのタイモンに触発されてブルジョア社会の人間を規定せんとした「価値形態論」を理解できる。<sup>13)</sup>「価値形態論」は貨幣の歴史的発生を説いているというような誤った解釈を避けることができる。<sup>14)</sup>

またA・スミスやプルドンの誤りを糺すことができる。彼らは貨幣を人智で廃することができると考えた。プルドンは時間紙券を発行して公正な社会の実現を展望したし、A・スミスもまた貨幣を自由に操作できると考えていた。

A・スミスにとって貨幣はその機能（計算機能、媒介機能、支払い機能、蓄蔵機能）から考察されているだけである。貨幣は人々の追い求めるモノという発想はスミスには存在しなかった。しかるに人々は貨幣を王として統括

されているのである。これら諸機能の根底はマルクスのように価値尺度機能にあるという考えはなかった。換言すると貨幣は価値尺度が説かれて後、続いて諸機能のカテゴリーという順序になっている。

### 価値実践の相互作用の表現体系

個々の価値実践は相互に作用しあって社会的物質代謝を結果として作動させている。

A・スミスはこの事態を個々人のセルフ・インタレストの実践が全体的には神の見えざる手によって作動していると云う。神の見えざる手ということでスミスは個々人のセルフ・インタレストの実践が相互に全体の機構を動かしていることの説明を回避した。

マルクスは資本の利潤獲得競争が全体として好況、恐慌、不況を周期的に繰り返しながら社会的物質代謝を作動させていることを説明した。価値実践の表現体というのは社会的物質代謝過程におけるモノ、ヒトのことであり、これらが秩序づけられて表現体系となっている。「表現体系」を読み取るということは表現体系から表現体に付与されている意味を読み取るということである。社会的物質代謝を認識するということである。

通常、人は自己の立場から表現体系の部分を都合よく解釈する。価値実践の相互作用によって構築されている表現体系の意味と個々人の解釈とは乖離している。

ブルジョア経済学の批判とは個々人の解釈のことであり、これを批判するということはこれを表現体系に位置づけることである。表現体に付与されている意味は表現体系からあたえられている。この意味を人は都合よく自己の立場を補強するために恣意的に解釈している。マルクスの『資本論』はこの表現体系の読み取りの「書」ということである。

『資本論』の解読難解さは読者がマルクスの批判しているブルジョアジーと同じ地平に位置しているところからきている。個々の価値実践と表現体系を関連させるとき、私が問題にするのは主体の側面である。私はこの関連

(経済=社会的物質代謝と個々の実践者)を「解釈」によって結びつけている。

### 制度の動態

社会の再生産への主体の関わりを「解釈」(正当化のための実践解釈, 学説史研究)を通じて考察する。主体は多様な可能性を秘めた存在であるが、彼、彼女は窮極的には価値実践者であり、使用価値実践者である。

価値実践者は全体としての表現体系を認識していないし、知覚してもいないのであるが、表現体系の「部分」を制度として認識し、知覚している。「制度」からの指令を理解することで価値実践のパタン化、方向づけを行っている。

これに対して彼、彼女は使用価値実践者としての性質も有している。使用価値実践とは本源実践のことである。滝沢が認識していたように価値実践は絶えず本源実践を包摂しようとするが、それは不可能なのである。本源実践であるが故に価値のロボットとはなり得ないのである。主体の価値化が深まれば、それを批判し、克服しようとする主体が必ず現れる。

諸制度は個人にとって社会環境である。主体を一構成要素としている社会環境である。

彼、彼女を規制している「制度」の客体的側面は価値実践の表現体系によって、彼、彼女の主体的側面はその表現体系の「解釈」によって与えられる。

「制度」と主体は、すなわち実践体と解釈は相互に不可分離であり、ともに発展していくということになるが、制度の動態は、この二側面の乖離の拡大、縮小、一致への繰り返しのによって与えられている。ただし解釈は表現体系から離れてそれ自体の論理性を追求するようになってくる。図式(一)に位置づけられる論述がそうである。

この論述は本来担っていた正当性の主張を、価値観を薄めて科学の装いをとってくる。

この点については、リカードが「富」についての言及を薄めて、量、価値

の分析に重点を置いたことから想起される。<sup>15)</sup>

乖離というのは「制度」の存在根拠、正当性の「解釈」が、解釈の対象である表現体系が「解釈」の中味とかけ離れてくるということである。

したがって乖離の拡大は、さらなる正当化のために「解釈」「イデオロギー」を流布せしめる。人は通常、「解釈」と表現体系との乖離の発生因を認識していない。

解釈者は、自己と解釈対象との間に存在している膜、あるいは解釈対象を浸しているエーテルの存在を認識できていないのである。そのために彼らは、エーテルに染まっている解釈対象を解釈対象そのものと思い込んでいる。彼らは社会が彼らに与えている眼鏡を通じて対象に接近している。彼らは眼鏡の存在を認識していないのである。

表現体系＝経済システムが、もたらすところの経済的悲惨を認識せざるを得なくなる。

実体を無知と人間性に還元するマルサスのような正当化解釈〔図式二〕を提示するようになってくる。経済システムが改善されてくると乖離は縮小に向かう。

かくして正当化解釈を通じて彼、彼女は制度の改革を行う。

そのとき彼らを浸しているエーテルそのものも変質してこざるを得ない。

学説史（正当化解釈）の検討が制度改革にとって重要であることを論じてきた。

これについては市場の万能を信じていた古典派経済学と決別したケインズの事例が有名である。またケインズは、貨幣＝金についての人々の観念の放棄を迫った。<sup>16)</sup>

私は制度の動態に関して学説史研究が重要である所以を論じてきた。それは制度の動態は客観的実体（表現体系）と正当化解釈との乖離感の程度が制度の改変の必要性を認識せしめるからである。制度の不都合性に人が気づくのは受け入れられている解釈、提示に解釈に疑問を感じるようになるからである。受け入れられている解釈は人がアイデンティティを感得している基盤

のようなものである。

K・ポパーの制度に対する見方を検討しておこう。

ポパーは、「制度」に対して漸次的工学者、あるいは技術者としての見方を採用する。

この見方の特徴は、制度をつまり表現体系を主体の外側に置いていることである。

したがって制度の改変は、家を建てる大工さんのように本来的には困難は生じない。

彼は道具、原料の論理に従うだけである。彼は表現体系の外に居るのであるから、自由な存在であり、外的制約を受けるというわけではない。私の見方では彼は価値実践者であり、表現体系（制度）の構成要素であり、解釈者なのである。だから制度の改変においては価値実践、制度、解釈の三要素を相互関連的に取り上げなければならないのであって大工さんの見方を採用できない。

ポパーは述べている。「ちょうど物理的技術者の主要な課題が、いろんな機械を設計したり、それらを作り直したり、世話したりすることであるのと同じように、漸次的社会技術者の任務はいろんな社会制度を設計しまた既存の諸制度を作り直したり運営したりすることにある。漸次的工学者はある目的にいたる手段として、あるいはある目的に役立つ方向へ変換可能なものとして、要するに有機体としてよりはむしろ機械として、制度を考える」制度の危機は機械の故障のようなものであって修理は容易になされる。同じように制度は主体の外側の存在物として主体とは無関係にその危機は克服されるのである。漸次的技術者は危機のよって来るところを克服するために全体としての社会を設計しなおす方法があるとは信じない。ポパーはマルクスの資本主義発展を取り上げて彼を歴史主義者・予言者と規定する。

ポパーの制度改革は彼自身が述べているように機械に油をさしたり、ボルトを取り替えたりするものであるが、実は制度を支えている実践の質（主体）を問題にしなければ機械の修理自体がうまくいかないのである。それは機械

(制度)の不具合をもたらしている実践の質の改良しなければならないからである。

ポパーの制度と主体の関係を考察するとき、シュムペーターの学説史(分析用具の展開)論との類似性に思い至る。両者とも検討対象の外側に主体を措定しているのである。

すなわち彼らの作品には主体が内在化されていないということである。<sup>17)</sup>

最後に再度、制度を簡単に要約しておこう。<sup>18)</sup>

1:「制度」は「表現体系」の部分と「社会的に受容された解釈」つまり常識によって構造化されている。「表現体系の部分」は価値実践の相互作用によって規制されているのにたいし、「社会的に受容された解釈」は実践とは乖離する。{表現体系でなく、その部分と云っているのは全体としての表現体系は個々人には認識できないからである。解釈対象としての表現体系は常にその部分である。} 価値実践を正当化する解釈は実践者の価値観によって規制されている。表現体系は実践者の相互作用によって規制されており、個々の価値実践の主観を越えている。

2:「表現体系の部分」と「社会的に受容された解釈」は乖離する。

解釈対象=部分的表現体系と解釈との間の乖離は単なる時間的不一致から生じた乖離ではなく、受容された正当化解釈との間に生じる乖離の程度は制度の不安定度を示している。

3: 解釈枠組とは人権諸規範を商品交換の規範的構成の内に取り込んだものである。

「解釈枠組」は商品交換の円滑なる作動に適応している。

4: 価値実践は制度によってパタン化、ルーティン化する。制度から彼、彼女は役割を与えられている。価値実践者として彼、彼女は匿名的、抽象的存在であるが、役割遂行が彼、彼女の人格を表す。

5: 制度が動揺、不安定であるとき、国家は制度を価値循環に適応させていくとともにそれに応じた「解釈」(=イデオロギー)を強引に形成してい

く。

以上の展開の論点は制度論の考察において重要なことは解釈、つまり学説史（社会観念）研究である。ポパーのような制度論には観念分析が入り込む余地はないが、この点こそ、私が強調する主体の側面からの制度論の考察に連なっている。

主体は {価値実践⇔表現体系⇔解釈} の図式に位置づけられる。表現体系を構成している表現体に価値実践者が意味を付与している。付与された意味を読み取ることが制度を理解する根本であり、読み取りは抽象力を必要とする。

6：価値実践の相互作用が、制度の正当化解釈と表現体系とが不都合を示してくるとき、新しい制度改革を構想しなければならない。構想せざるを得ない。制度の土台が腐食してきていることに実践者は気づいてくる。制度の腐食は価値実践者でなく使用価値実践者が制度の危機を感得する。ここで私の云う使用価値実践とは全体的に考察を可能にする。それは生態系を重視する実践のことである。細分化の追求によって達成された「科学」または全体的視野を欠落させた非科学的作品を生み出す。

- 1) 拙著『資本主義社会の再生産と人権観念』110, 111, 112頁, 晃洋書房 1993
- 2) 柴田敬「労働価値説と資本価値説」所収『資本主義世界経済論』（上）
- 3) マルクス 62頁, 『経済学批判』杉本俊朗・訳 大月書店
- 4) マルクス 78頁, 『資本論』大月書店, 国民文庫, 1分冊
- 5) 前掲『経済学批判』293頁
- 6) 「僕の本の最良の点は・・・労働の二重性」を明らかにした点にあるとマルクス自身が語っている。すなわち, 「最良の点が労働の二重性」であるということの本稿は明らかにしようとしている。『資本論に関する手紙』（上）159頁, 岡崎・訳, 国民文庫  
拙著, 前掲書「3章, 1節, 価値実践, 2節, 使用価値実践」59頁→87頁

- 7) 滝沢克己『現代への哲学的思惟』三一書房, 91頁
- 8) 拙著・前掲書 11頁
- 9) 杉本俊朗・訳, 59頁, 『経済学批判』大月書店, 国民文庫
- 10) 前掲『経済学批判』72頁
- 11) 拙著・前掲書, 4章「経済解釈と経済カテゴリーの形成」
- 12) ラインハルト・ベンディクス, 所収『産業における労働と権限』東洋経済, 145頁, 大東・鈴木, 訳, Reinhard Bendix "Work and Authority in Industry"
- 13) 『経済学・哲学草稿』訳, 藤野渉国民文庫, 196頁
- 14) 拙著・前掲書, 205頁→216頁
- 15) 拙著・前掲書, 232頁
- 16) 拙著・前掲書, 「6章, 5節」207頁
- 17) K・ポパー, 『歴史主義の貧困』訳, 久野・市井, 中央公論社, 103頁

KARL R POPPER the poverty of historicism 1957

- 18) 拙著, 前掲書233頁→234頁 人は「制度」を意識的に設計, 構築できている。構成要素であるモノの組み合わせを変えることで制度を構築できている。パタン化, ルーティン化の実践を変質させること, これが解釈の変更に至るとき, 制度の改変が可能になる。解釈の変更というのは実践の存在根拠, 正当性を変えることである。解釈は制度の正当性を主張するものであり, 制度の作動メカニズムを説明する。「解釈」は正当性の主張については規範的であるが, 作動メカニズムの説明は客観的論理的となる。このように解釈の中味を分割することは制度の維持者が一般に採用している仕方である。客観的論理というのは技術的説明が有している性格である。私は解釈の中味は分割できないと考えている。解釈の客観的論理は恣意的ではなく, 表現体系が従っている秩序, 表現体系の各部分である諸制度の関連を明らかにすることによって与えられる。パタン化, ルーティン化の実践は表現体系を構成している人, モノが発信している感覚, 意味を共有し, 従っているということなのである。表現体系に位置づけられている人, モノの関連を読みきることが, 客観的論理の認識である。彼らはパタン化され, ルーティン化された実践の過程において自己の実践を解釈している。彼らが付与する意味は即自的には感覚的に把握されているそれらの具体的属性からきている。したがって彼らは所

与としている（表現体系が与えている）意味の形成を明らかにし、彼ら自身の実践を変えていかなければ、「制度」改変への方途を見出すことはできないであろう。既述のように制度論に対する私のキーワードは {価値実践⇔表現体系⇔解釈} である。解釈と表現体との乖離が表現体系=制度の動きをもたらすのである。

19) 拙著・前掲書, 262頁